


 研究
報告

シソにおけるアザミウマ類の発生と スワルスキーカブリダニを活用した 総合防除について

大分県農林水産研究指導センター農業研究部 いとう たくま やまさき しゅういち 伊東 拓真・山崎 修一

大分県農林水産部地域農業振興課 いとう れお 伊藤 玲央

はじめに

大分県はシソの産地であり、大分市を中心として連棟強化型ハウスで周年栽培が行われている。同市の生産部会にあたるJAおおいた大分市大葉部会では、11人の会員が産出額約15億円を計上しており、個々の生産者がそれぞれ県内屈指の生産規模を誇っている。

一方、同生産部会ハウス内では、近年アザミウマ類が多発し、葉の食害による商品化率の低下が問題となっている。シソはわずかな傷によっても廃棄を余儀なくされるため、アザミウマ類を低密度に抑制する防除技術の開発が求められている。

シソに対する発生種には、クロゲハナアザミウマ（以下「クロゲ」と略記）、ミナミキイロアザミウマ（以下「ミナミ」と略記）およびモトジロアザミウマ（以下「モトジロ」と略記）等が知られている（広瀬，1998；伊藤・大野，2003）。本県ではアザミウマ類の多発時に1作で最大15回の薬剤防除を余儀なくされ、最大で約1億円の減収が生じている。そこで、本県産地における本虫の発生実態、被害状況およびスワルスキーカブリダニ（以下「スワル」と略記）を活用した総合防除体系について検討を行ったので報告する。

なお、本研究にかかる現地試験は、JAおおいた大分市大葉部会に御協力いただくとともに、石原バイオサイエンス株式会社には、システムスワルくんロング（スワルバンカーロング）を御提供いただいた。ここに記して篤く御礼申し上げます。

Occurrence of Thrips on Green Shiso Plants and Integrated Control using *Amblyseius swirskii*. By Takuma ITO, Shuichi YAMASAKI and Reo Iro

（キーワード：シソ、アザミウマ類、薬剤感受性検定、スワルスキーカブリダニ）

I シソに発生するアザミウマ類と被害

2021～23年にかけて大分市の現地7圃場で調査を実施したところ、以下の3種が被害の主要因であることを確認した（図-1）。なお、調査は上位葉（収穫葉付近）および下位葉（収穫位置以下）の各2葉を見とり調査し、被害度は下記の計算式により算出した。

0：被害痕なし

1：被害痕がわずかに見られる（1～2個）

2：被害痕が葉の半分程度に見られる（3～9個）

3：葉全体に被害が見られる（10個以上）

$$\text{被害度} = \frac{\sum (\text{被害指数} \times \text{被害指数別葉数})}{(\text{調査葉数} \times 3)} \times 100$$

クロゲは、延べ3圃場で確認され、葉には集中的な吸汁により白斑状の被害痕を引き起こした（図-1）。また、5～8月は低密度で推移したものの被害度は高く推移した（図-2）。

ミナミは、1圃場で被害が確認され、展開前の葉への食害に起因する葉の隆起や奇形が確認された（図-1）。また、他種と比較し上位葉への寄生割合や被害度が高かった（図-2）。

モトジロは、1圃場で被害が確認され、かすれ症状を生じた（図-1）。5～7月の低密度時は収穫葉への被害はほとんど認められなかった反面、増殖力が高く、密度が高まるにつれ上位葉および下位葉に寄生が見られるようになり、寄生頭数が顕著に多くなった8月中旬には被害度も顕著に高くなった（図-2）。

クロゲは、低密度でも被害度が高く、白斑状の被害痕は目につきやすく、収穫葉の場合は廃棄となる可能性が高い。また、ミナミは、他種と比較し、活発に移動するためか、定植直後から隣接する別作型からの飛び込みが発生しており、今回の調査でも開始時から上下位葉問わず確認されている。このことから、両種は、定植直後か